

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

田中雅夫 (1912-1987) は、1934年に東京高等工藝学校 (現：千葉大学工学部) 印刷工芸科を卒業後、印刷会社勤務を経て1937年に弟の濱谷浩と「銀スタジオ」を設立しました。このころ写真評論活動を開始しています。幼馴染の桑原甲子雄が『カメラアート』1937年2月号で特集されるにあたり、「本人をよく知る写真知識のある人」として記事依頼を受けたことがきっかけでした。同誌では1940年に「凡人倶楽部同人」として、風刺写真の文章などを担当し、7月号から木村伊兵衛などの作家論を寄稿しています。

戦後は国立美術研究所および国立博物館に勤務しながら『写真撮影叢書』(後の『フォトアート』)で写真評論活動を再開しました。特に1950年代のリアリズム写真論争においては、土門拳の主張を積極的に評価しました。1955年3月号から『日本カメラ』の編集長に就任して1961年7月号までつとめ、1965年に日本カメラ社を離れた後は、東京総合写真専門学校講師や日本リアリズム写真集団副理事長などを歴任しました。



『私の昭和写真史』

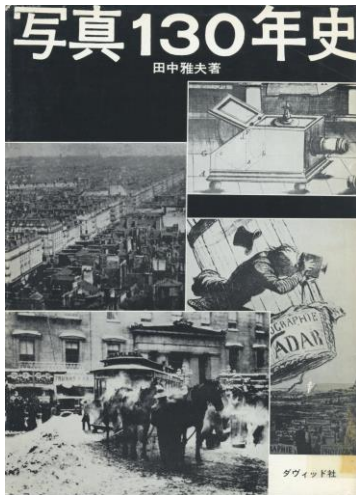
主な著書に、中村立行の出現がきっかけで執筆に至ったと語る『ヌードフォト入門』(アルス・1950年)を皮切りに、『写真120年史』(ダヴィッド社・1959年)、『写真130年史』(同・1970年)、『現代カメラ新書25 風景写真研究』(朝日ソノラマ・1976年)などがあります。

1980年には、東洋書店から『私の昭和写真史』を上梓しました。表題の内容は自叙伝ですが、写真関係者とのエピソードや意外な接点などが記されており、興味深い内容です。そのほか、『日本フォトコンテスト』連載の巻頭エッセイ「シャッターのあとさき」と、『フォトアート』連載の「だらだら作家雑評」をまとめたもので構成しています。

また1970年代後半から80年代にかけては、写真雑誌各誌にて連載を行っていました。『カメラ毎日』では、1978年2月号から1979年9月号まで「いい気なモン談義」、1980年2月号から1983年12月号まで「今月作品 如是我観」、「激評」、「新・いい気なモン談義」を連載しました。1984年3月号から1985年4月号までは、自叙伝といえる「回想の写真五十年」を連載しました。同誌の休刊で未完結となってしまったのが惜しまれる内容です。

『日本カメラ』では、1980年1月号から1982年12月号まで「作家・作品・なぜ・さて」、「諸国新アマチュア事情」、1983年1月号から1986年6月号まで「田中雅夫の賢答愚答」を連載しました。特に最後の連載は、多趣味と基礎教養に裏打ちされたユニークな写真身上相談として人気を集めました。

このほかには、須田一政と組んだ仕事の特筆されます。『日本カメラ』では1978年1月号から1979年12月号まで「民謡山河」の文を、『アサヒカメラ』では1982年1月号から1983年3月号まで「現代東京図絵」のエッセイを担当しました。



『写真130年史』